

—《書評》—

吉尾寛編 汲古書院

『民衆反乱と中華世界——新しい中国史像の構築に向けて——』

(愛知大学名誉教授) 馬場 毅

吉尾寛氏の序文によれば、本書は2007年度から2010年度にかけて文科省科研費補助金（基盤研究A）による共同研究「日本・中国・台湾の研究者による中国の民衆運動の史実集積と動態分析」の一部であるという。本研究は、日本の百姓一揆研究の成果に示唆を受け、中国の民衆運動の史実、とりわけ基層社会に立ち入ってどれほど掌握できているかを探ることとだとしている。またこの問題の解決のために、テキストデータのみならず、画像データを用いて手がかりを共有しようとする、としている。特にこの点は民衆運動研究のための共通のプラットフォームを作るという意味で画期的である。

対象となる民衆運動は、宋代までは谷川道雄・森正夫編『中国民衆叛乱史』の成果をふまえて、陳勝・呉広の乱から黄巢の乱まで、宋代以降については、研究メンバーの業績に照らして方臘の乱から民国期の台湾などの海賊を対象にしている。そしてそれらの研究業績を以下の4部に分けて掲載している。以下に目次を付すが、南炳文、卞鳳圭、李小林、唐立宗、牛建強論文などの中台の研究者の論文は後ろの頁から載せられているし、日本人研究者の論文もテーマにより4部のどこかに載せられているが、以下の目次は必ずしも頁順に並んでいるわけではない。

吉尾 寛「序文」

第一部 中国史の全体構造の理解に向けて

小林一美「中国史における『文と武』、『官と賊』、『漢人と少数民族』の間」

葭森健介「民衆運動から見る中国史の特質——唐代以前——」

佐藤公彦「民衆反乱と王朝交替の循環構造——元末以後の華北交界地区の宗教反乱を中心に——」

甘利弘樹「近年における民衆運動史研究の動向——世界史的観点から中国民衆反乱史研究を考える——」

南 炳文「關於中國古代民衆群體暴動事件的幾點淺見」

濱島敦俊「江南に“封建”有りしや？——一九三〇年代上海郊区の地籍図から見る——」

第二部 <主体>への新たな視点

柴田 昇「秦末の抵抗運動」

榎本あゆち「東晋・南朝の民衆運動と水上交通——南康の営民と鵲舫船の越人——」

松浦 章「十九—二十世紀における浙江沿海・台湾海峡の海盜」

卞 鳳圭「臺灣近50年對於清朝動亂問題研究之分析」

山田 賢「秘密結社と『アジア主義』——近代日本の中国認識をめぐって——」

第三部 王朝交替の局面と基層社会

伊藤宏明「唐五代期における『逃げ城』について——民衆運動の一側面——」

渡 昌弘「元明交替と国子学政策の継承についての覚書」

李 小林「地域特點與民衆群體暴動的關係——以劉六・劉七起義為中心——」

唐 立宗「明代嘉靖朝江西・廣東交界的民衆倡亂與地方統治——以趙用賢〈先大夫行述〉為中心的討論——」

牛 建強「明末流賊劫掠與河南地方社會發展的阻斷——兼及特別時期地方政府和士紳群體的危機應對——」

菊池秀明「廣東凌十八蜂起とその影響について」

第四部 実地調査の可能性とその意義

戸田裕司「北宋・方臘の乱の史跡調査紀要」

井上 徹「旧羅旁地方調査記録——ヤオ族の痕

跡を求めて——」

森 正夫「民衆反乱史研究とフィールドワーク
——明末清初福建省寧化県における黄通の抗
租反乱に即して——」

三木 聡「乾隆年間の福建寧化県の長閩抗租に
ついて——新史料二種の紹介を中心に——」

稲田清一「謝氏族譜と地籍史料についての覚え
書き——福建省寧化県の事例から——」

堀地 明「清代刑科題本と乾隆十年（一七四五）
山西大同府天鎮県鬧賑案」

吉尾 寛「『寨』をめぐる景観についての覚書
——捻軍の乱における安徽省潁州府太和県を
例にして——」

都築晶子「あとがき」

以下個々の論文に詳しく論及することは紙数が
限られているし、私の能力を超えるので、各論文
について簡単に紹介し、その後若干の私見を述べ
たい。その点各筆者にご寛恕いただきたい。

第一部は、「中国史の全体構造の理解に向けて」
となっているが、従来の中国史の全体構造の理解
に対しての異議申し立てにとどまらず、新しい観
点の提示がある。

総じて従来の研究が、中国史を近代社会、近代
文明に最高の価値を置く進歩史観にもとづく史的
唯物論の発展段階論のあてはめ、あるいは民衆反
乱の研究対象が闘争の主体に集中したり、その性
格を一元的に階級闘争に落とし込む方法への批判
が強調されている。

例えば小林一美氏は「以上のように、十九世紀
から今日までの歴史を見れば、中国史を世界史の
発展段階論や普遍的近代に至る『東洋的近世』『近
代史』などと言う概念を適用して理解することは、
無意味であり且つまた無謀であることがわかる。」
(35頁)と述べ、かつ「中国民衆反乱史の歴史に
おいては、漢代以降アヘン戦争まで、その組織形
態・宗教倫理・政治思想や倫理等の面で、飛躍的

な『進歩発展・合法則的前進』を確認することは
出来ない」(25頁)と述べ、また佐藤公彦氏は王
朝交替と民衆反乱の循環構造を述べ、その上で華
北、特に5省交界地区においては、貧困（流動性）
と暴力、交界性（アジール）＝治安行政権力の空
白空間、宗教、武術を介した社会的結合、これら
が民政破壊の「絶望性」、あるいは宗教弾圧にと
もなう生存危機を感受した「絶望性」とメシア的
易姓革命の「幻視」が結びついて「宗教的」「民
衆反乱」が周期的に繰り返されるとし、14世紀か
ら20世紀までの宗教反乱は、「一回きり」「特殊な」
「歴史的個性」というよりも、一般的かつ典型的な
ものの性格を持つように思われる、と述べている。

また小林氏は中国史を文人官僚エートスと戦士
武人エートスの二つの倫理の対抗関係と見、その
後宋代以後の「科举官僚制」の全面的展開によっ
て、戦士武人のエートスを正統文化の座から下層
世界に追放し、春秋時代の戦士武人は遊俠、任俠、
無頼、悪少年、博徒、巫術者へと転落し、水滸伝、
白蓮教、義和団の民衆文化が展開すると述べて
いる。

また濱島敦俊氏は、民国期の1930年代江南デル
タの上海郊区の2県の地籍図をもとにし、実地調
査を行った結果も踏まえて、当該地域は地主－佃
農地帯ではなく自作農地帯であり、このような地
域は江南に広範に存在し、「江南に封建なし」で
あるとし、そういう状況下でも、中共は土地改革
から文革にかけて無理に「地主」「富農」を製造し、
農民相互に「階級闘争」をやらせた結果として農
業を破壊したとしている。

一方、葭森健介氏は、唐代以前における陳勝・
呉広から黄巢・王仙芝までの民衆反乱についてそ
の性格を表にまとめ、民衆反乱の矛先は国家、特
にその末端の地方官に向けられ、その一方で基層
社会内部の矛盾により発生することは少ないと述
べ、基層社会内部の生産関係、階級関係の矛盾で
民衆反乱が起きたという従来の単純な階級闘争史

観を批判している。また甘利弘樹氏は、最近の日本史、東洋史（特に中国史以外）、西洋史の民衆運動の研究成果を整理し、民衆運動の定義は多様に設定できること、民衆運動史の方向性は市民社会への寄与など従前以上に価値あるものへと飛躍する可能性があること、民衆運動史は多数のテーマについて世界史というフレームワークの中で比較史的考察が果たせると述べ、中国史の民衆運動史を比較史の中で位置づける重要性を指摘している。

南炳文氏は古代の民衆集団の暴動は、多くは「官逼民反」であり、それらは「起義」と称してもいいし、歴史的に評価できる点もあるが、暴動には虐殺、略奪、基層社会の民衆の逃亡、人口減少が伴うというマイナス面もあり、かつてのような民衆暴動の一面的な賛美ではなく、それらを含めての総合的判断の必要性を述べている。

第二部は「主体への新たな視点」となっている。そこでは農民に限らず民衆反乱に於いて主体となった様々な勢力が述べられている。

まず柴田昇氏は、秦末の陳勝・呉広の乱を中心に分析し、統一秦に対する民衆的抵抗の根拠は戦国期の王権であったとし、このことは反秦抵抗運動が、貧窮農民の暴動というよりも、ある程度の物質的豊かさと知的能力を有する人々を主要な担い手とする運動という性格を色濃く持っていたことを示唆するのではないかと述べている。

榎本あゆみ氏は、民衆反乱と王朝革命の両者ともに民衆（特に水上交通者）が参加しているので、民衆反乱の範疇に収めるとし、その上で東晋末、反乱軍の指導者となった盧循の部下であった徐道覆が広東から北上した時に、南康郡で水上交通者が反乱軍に参加しその移動を可能にしていることと、梁末陳初、陳朝の創始者陳霸先が広東から北上する際にも南康に於いて形成した水軍が大きな軍事力を彼に付与したとし、これらの水上交通者の分析を行い、民衆と基層社会の変化を述べて

いる。

松浦章氏は、豊富な資料にもとづき、従来研究の行われていない19世紀から20世紀における浙江・福建沿海を中心にする海盜の実態について述べている。

卞鳳圭氏は、最近50年の台湾における清朝の動乱問題に関する研究について、国家図書館所蔵の著書、論文を対象にして（その中には松浦章氏の発表した論文も含まれている）、朱一貴事件から緑営まで13の項目に分けて紹介している。

山田賢氏は、孫文や陶成章などの革命派の天地会・哥老会などの会党系の秘密結社に関する言説を分析し、それらが「反清復明」を目的とするとしているように、歴史的に連続する「民族主義」の伝統を発見しようとする欲望の言説であるのと同様に、荒尾精や東亜同文会に参加した佐藤宏、平山周などの「アジア主義者」達の秘密結社に関する言説も、高いモラルと堅固な意志を持ちながら「文明」的でないために「革命」を果たし得ない中国社会——それは文明化した〈われわれ〉の指導を必要とする——という欲望の言説である、と述べている。

第三部は「王朝交替の局面と基層社会」となっている。基層社会を対象にして、鎮圧側、反乱側、どちらでも大きな役割を果たした土豪や士人の指導的役割にも注目が集まっている。

まず伊藤宏明氏は、唐五代期において政府軍の討伐、叛乱・盗賊・異民族の略奪から地元を防衛する自衛集団の拠点を「逃げ城」と名付け、それを史料から摘出し表化して位置、景観、構成員を分析し、民衆反乱に抵抗した勢力について、その指導者は郷豪（土豪）であり、彼らが郷民を指揮して郷里を守り、また王朝側の防衛拠点も「逃げ城」と同様な場所に設置し、民間と同様な集団を組織したとしている。また「逃げ城」の指導者である郷豪達は次の時代を担う新しい存在であったとし、保守的な動きとして切り捨てるべきではな

いとしている。

渡昌弘氏は、元明交代期、民衆反乱の中の有力な勢力が、新たな王朝成立を宣言し、知識人の登用を行い、夏、明は国子学の設置、もしくは整備の後に科挙を行ったが、このような手順は元朝と同じであり、また明朝は元制の踏襲の後、国子監への改称とともに積分法を確定したとし、このように人材吸収という点では、民衆反乱の中で成立した政権が、従来とは大きく異なるところがなかったとしている。

続いて明代を対象にした3氏の論文が並び、まず李小林氏は、明代正徳年間の劉六、劉七起義の特色として、中央政権との関係が密接であること、屯田の軍士が重要な役割を果たしたこと、起義の行軍が主として騎馬に頼ったことをあげ、運動の主体が所謂民衆運動とは異なる事を指摘している。

唐立宗氏は、明代嘉靖朝期の江西、広東交界で任官した趙承謙の事績をたどりながら、この地域で不法な手段で勢力を拡大した新興の豪族勢力は地方の盗賊と利害が対立する面を持ちながらも共存したとし、官僚は省の交界という地理的条件もあり、地方勢力を統治し難いとする彼らと協力して地方秩序を維持し、他方移住民に対しては鎮圧を行うなど地域に応じて臨機応変に対応したとする。

牛建強氏は、明末李自成を含む流賊の河南省での強奪に対して、地方政府や士紳集団がどのように対応したかを分析している。その上でこれらの流賊と地方政府や士紳集団の戦乱による基層社会の崩壊状況について、多くの死傷者の発生、都市、街道、役所、橋、庶民の家などの社会的インフラの破壊、家庭生活の破壊や心理的トラウマの残存、大量の土地の荒廃、さらに政府による防衛のための城や堀の修築、寨の建築により社会的な財富の浪費が起きたなどと「農民戦争」のマイナス面を指摘している。

菊池秀明氏は、広東省信宜県でのフィールドワ

ーク、および檔案史料などを踏まえて、太平天国初期に於ける凌十八蜂起について分析している。まず凌は、それなりの経済的基盤を持った客家人であるが、社会的上昇は科挙エリートによって閉ざされており、出稼ぎ先で上帝会にめぐりあったとしている。また天地会軍との連携は十分な戦果をあげられず、かつ彼らの意向に左右され金田の本隊との合流ができなかったとしている。一方、清朝側の問題点を指摘し、地方長官は反乱発生の報告を喜ばず、地方官は安撫政策をとり、清軍も戦意を欠き、さらに多くの清朝官僚にとって反乱軍の平定は、自己の昇進の手段でしかなく、統一性に欠けていたとしている。

第四部は「実地調査の可能性と意義」となっており、実施されたフィールドワークを踏まえた論文から成り立っている。

戸田裕司氏は、北宋時代の方臘の乱の舞台となった浙江省杭州市淳安县のフィールドワークを踏まえたものであるが、日本社会に於ける義民顕彰が共同体のアイデンティティを維持・強化するためのイデオロギー装置と規定できるのに対し、共同体原理が見いだし難い中国社会においては、それに対比できるのは国家による「認定」あるいは「認証」であるとし、方臘の乱の史蹟は交通手段の確保も困難であるが故に、観光資源としても社会教育(思想教育)施設としても活用できなかったケースと言えようとしている。

井上徹氏は、明代中期、ヤオ族を中心にして起きた反乱の舞台である広東省西部の山間部の羅旁地方についてのフィールドワークを記録している。現在ヤオ族はこの地域から姿を消しているが、羅定市分界鎮金河村が旧ヤオ族の旧居住地とされており、染料製造工場の跡地があったこと、加益鎮では染料加工場、榕樹の根本の社に祭られる盤古石など、ヤオ族にかかわる多くの痕跡があり、ヤオ族の漢族への同化のプロセスを推測させる材料であるとしている。

その後に明末清初に起きた黄通の抗租反乱の舞台であった福建省寧化県の調査を踏まえた3氏の論文が続く。

森正夫氏は、黄通が当時住んでいた留猪坑村である現在の河龍郷明珠村について調査し、現地の住民にとって労働し生活する明珠村ゾーンにおける黄通関係の伝説は石像の遺物、遺跡を伴って継承されてきたものであり、地域社会の文化遺産としての性格と価値を持っているとしている。また黄通伝説は黄氏族譜を紐帯とする社会的基盤によって保持されてきたものであるとする。

三木聡氏は、寧化県で収集した謝氏家廟の碑刻、謝氏の族譜の新資料を踏まえて、黄通の抗租反乱で大きな役割を果たした長関について、それは消滅したのではなく残存したが、乾隆中期においては、それは抗租を行う佃戸の組織、あるいは組織的な抗租を行う統率する領導者を表す名辞として現出していたが、それは強固な実体を伴うものというよりは、抗租と結びつくイメージの所産のように思われるとしている。

稲田清一氏は、寧化県南舗を中心とした謝氏の祀産と1930年代の国民政府の土地調査事業および1950年代の土地改革で作成された謝氏の祀産に関連する地籍史料を整理して、1、民国期の土地調査事業と土地改革の文書上の継続性を指摘するとともに、2、民国期の土地編査の前後に、謝氏は祀産管理方式を改革し、集中的・統一的管理への転換を進めており、それに伴い祀産登記する際も、祭祀対象者の名義で登録したとしている。

堀地明氏は、清代刑科題本の解題をした上で、それを用いて乾隆10年山西省大同府天鎮県鬧賑案、すなわち旱害の中で知県の行った賑糧を奪った事件を分析し、さらに裁判時に知県の行った擬律と科刑を述べている。死刑案件の法的処理においては、物的証拠より供述が重視され、県審での判断が、上級審・三法司・皇帝に及ぼす影響は重大であるとしている。

吉尾寛氏は、捻軍の乱において重要な役割を果たした寨について、安徽省潁州府太和县を対象にして、民国『太和县史』に記載された270余りの寨についての呼称、規模、修築年に関する詳細な表を作り、さらに寨全体の約半分の地点と分布の概説それぞれから読み取れる特徴を、寨は日常生活を営む場所であるという視点から、市集、溝渠、団練との関係について分析している。

都築晶子氏は、あとがきで魏晉南北朝における道教における政治・社会と関わる言説について述べている。

以上本書の紹介を行ったが、現在日中台の学界で民衆反乱史研究が多く研究者の関心と呼ばなくなっている状態の中で、本書は民衆反乱史研究を新しい視点から再興する試みだと評者は感じている。第一部で民衆反乱を分析する際に、近代に最高の価値を置く進歩史観に基づく史的唯物論の発展段階論へのあてはめの無効が指摘され、それに代わるものとして宋代科挙官僚制の全面的展開により戦士武人的エートスは、下層へ追放され、水滸伝、白蓮教、義和団の民衆文化が展開されるという指摘とか、王朝交替と民衆反乱の循環構造の指摘、さらには14世紀以後の華北5省交界地帯での宗教的民衆反乱が周期的に発生しているという指摘が提示されている。さらに江南には自作農地帯も広範にある中で、そこを無理矢理地主・佃農地帯とし、「封建制」を見いだして来た中国共産党の実践が日本の中国民衆反乱史研究へ与えた影響についての見直し、例えば従来の抗租闘争の評価などの見直しの提示もあると思う。その他に、唐代以前の民衆反乱は、その矛先を国家の末端の地方官に向けるものが多く、基層社会内部の生産関係、階級関係で民衆反乱が起きたという単純な階級闘争史観への批判もある。さらに民衆運動の定義は多様に設定でき、民衆運動史は多数のテーマについて世界史というフレームワークの

中で比較史的考察が果たせるという指摘もされている。

民衆反乱の主体については、従来よくいわれた土地を失い生活に困窮した貧窮農民の反乱というよりも、多様な主体が参加したとの提示がされている（ただしこれは民衆反乱の参加者が何十万となれば多くの貧窮農民が参加してくると思うので、主体というとき反乱の指導者達とそれに追従する人達とを分ける必要があり、以下に述べられているのは、主として指導者達の事を考えるべきではないかと思われる）。例えば陳勝・呉広の乱など反秦抵抗運動は、貧窮農民の暴動というよりもある程度の物質的豊かさや知的能力を有する人々を主要な担い手とする運動ではないかという指摘がされている。また明代正徳年間の劉六、劉七起義について、中央政権との関係が密接であり、屯田の軍士が重要な役割を果たしたことなどにより、運動の主体が所謂民衆運動とは異なる事を指摘している。また太平天国初期の凌十八蜂起の凌はそれなりの経済的基盤を持った客家人であるが、社会的上昇は科挙エリートによって閉ざされており、連携した天地会の意向に左右され、金田の本体との合流ができなかったとしている。その他に東晋末の水上交通者や19世紀末から20世紀の沿海地帯の海盜などの直接生産者ではない主体の分析がなされている。また同時期の天地会・哥老会の会党系の秘密結社に対しての孫文らの革命派と日本の東亜同文会に参加したアジア主義者の言説を分析し、民衆反乱の主体というより指導の客体としての秘密結社についての両者の言説の差異も指摘されている。

次に基層社会を対象にして、鎮圧側、反乱側の両方で大きな役割を果たした土豪、士人の役割、および国家や官僚の反乱への対処に注目がされている。例えば、唐五代期において政府側および反乱側などから地元を防衛する自衛集団の拠点「逃げ城」における土豪の役割への注目、さらに民衆

反乱から成立した明朝において、知識人の登用という点では、元代とは大きく異ならないという指摘がなされている。さらに明代嘉靖朝期の江西、広東交界地域では、新興豪族勢力は盗賊と利害が対立しながら共存し、地方官僚も彼らと協力して秩序を維持したとしている。さらに明末、李自成を含む流賊集団の河南省での強奪に対し、地方政府や士紳集団がどのように対処したかが分析されている。そしてこのような戦乱の中で基層社会が崩壊していったとし、「農民戦争」＝民衆反乱に対して、かつての中国の学界のような全面的な評価のみではなく、社会へのマイナス面への評価がされている。また太平天国期初期の凌十八蜂起の際に清朝側の地方官僚は、安撫政策をとり相互の統一性を欠き、清軍も戦意を欠いていたとして、民衆反乱と対の関係になる清朝の地方官僚および軍の問題点を指摘している。捻軍の乱の時に、土豪の下で地域社会の防衛拠点であった寨の実態を詳しく分析している。その他に、乱に対しての官僚の判決を通しての彼らの秩序意識を垣間見えるものもある。

フィールドワークを踏まえた論考の中では、歴史の集団的記憶という観点から、いくつかの問題提起があると思う。まず日本社会において義民顕彰が共同体の集団的記憶として、イデオロギー的役割を果たすのに対し、中国では国家の認証＝国家の歴史の記憶となるとし、ただしそのような位置付けがされているからと言っても、すべてが有功に活用されるわけではなく、交通手段が不便なため、方臘の乱の史蹟のような失敗例もあること。ただしすべてが国家の認証＝国家の歴史の記憶となるのではなく、黄通の抗租反乱に関連して、よりミクロな明珠村ゾーンにおける黄氏宗族での集団的記憶があること。その場合、族譜が集団的記憶の重要な役割を果たしており、その他に石像の遺物、遺跡も集団的記憶に重要な役割を果たしていること。このように族譜は歴史の集団的記憶に

重要な役割を果たしており、その場合、抗租の対象となった田を所有していた謝氏の族譜、ならびにその家廟の布告も黄氏宗族の集団的記憶を補完する役割を果たすこと。なお文字史料以外に、広東省羅旁地方の染料工場の跡地や榕樹の根本の社に祭られる盤古石などの物的遺跡もかつてこの地域にヤオ族が住んであり、やがてそれが漢化していく歴史の集団的記憶に関連するものであろう。

このように本書には、実際に現地で行ったフィールドワークを踏まえて、書かれた論文が多い。たとえ何百年以前の民衆反乱でも、外国である現地の景観を踏まえて書かれた論文は、自然的景観も反乱当時とは変化している可能性があるとしても、日本国内にいてはわからない新しい知見を加えてくれる。ましてやそこで収集された族譜などの文字史料や遺跡などの歴史の記憶に関連するものを加えているのでその感を強く持つ。さらに本書には、付録として調査した現地各地の写真がDVDに記録されていることも画期的なことである。

以上のように本書は、随所に民衆反乱史を新しい視点から再興する試みがみられるが、最後に若干の注文をしたい。まず本書は様々な論文を4つのテーマに整序しており、その点で編集の手が加わっていると思う。しかしながら本書には、中国国家論や民衆反乱史の方法論についての大きなテーマを扱うものから、個別の民衆反乱と士人、官僚など鎮圧側を述べるものや、国家の知識人政策、さらには研究史の紹介、清代の裁判、現地調査の報告があり、本書の全体的なテーマが不明確であり、その点をより整序されると良かったと思う。本書を一読して、どうしても個別論文の集積という感を拭えなかった。また折角作成した表が小さすぎて拡大鏡を使わなければ見えないものがある。この点も配慮してもらいたかった。

しかしながら本書には中国民衆反乱史を再興するための新しい視点が随所にあり、またもともなるプロジェクトが、民衆反乱のテキストデータや

画像データのデータベースを作成しようという画期的な試み行っており、これもさらに発展することを期待したい。

(2012年3月刊, 760ページ, 本体9,000円+税)